

4 自然災害に気をつけたい地名

最後に、自然災害に気をつけたい地名として皆さんにも身近な小字（こあざ）名を取り上げたいと思います。豊川市域は地形上、北部山地や西部山地を中心とした山地・山麓部と、上郷（うわごう）と呼ばれる中央洪積台地、下郷（したごう）と呼ばれる豊川沿いの低地及び沿岸部の大きく3つの地域に分けられますが、その地域ごとに地形や土地利用に応じて小字名にも特徴が見られます。

まず山地・山麓部では山・沢・下・谷といった文字が小字名に含まれる場合が多く、上郷では野・屋・畑といった文字が、また下郷では下・田・川（河）・島といった文字が多く見られます。また豊川市域に特徴的な小字名として、市域で26か所を数える「貝津：カイツ」や、17か所を数える「荒古（子）：アラコ」があります（小字図等から拾い出し）。「貝津」は三河地方の特に山間部に多い地名で、一般的に屋敷などの土地の区画を意味する垣内（カイト・カイツ）に由来すると言われますが、市域では小河川沿いに分布する傾向もみられます。また「荒古（子）」は一般的に荒地を新たに開墾してできた田畑（新墾）を指すと言われ、上郷・下郷に共通してみられる地名です。この他、傾斜地・崩れ岸を表す「埴（ママ）」を付した埴上・埴（埋）下といった小字名も市内に6か所見られます。こうした地形や土地利用をよく表す小字名について、崩壊地名などのいわゆる災害地名も参考としながら、各種自然災害に気をつけたい地名を紹介します。

（1）洪水

洪水の危険性については、「豊川市洪水ハザードマップ 2017」を確認いただければ、各河川の計画規模（豊川及び豊川放水路については計画規模及び想定最大規模）の最大浸水深を知ることができます。想定最大規模では下郷の善光寺川流域（西島町から小坂井町にかけて）や三上・金沢の霞地区では5mを超える浸水となり、想定雨量である豊川流域の1日総雨量が600mmを超えることがあれば、各河川の堤防が決壊しなくても内水がはけずに浸水被害が広範に及ぶ可能性があります。よって、各河川沿いの地域及び下郷や沿岸部の低地では、洪水の際に自宅2階等への垂直避難が安全かどうかを事前に確認しておくとともに、旧河道を意味する古川や、カワラ（川原・河原・磧）といった小字名が自宅近くにある場合には、早めに冠水が始まる危険が大きいため、避難所等への避難の際に、早めの避難と冠水の危険の少ないルートでの避難を心掛ける必要があります。

なお、洪水については災害地名として「足」が「悪し」に通じるとして、小字名では小田渚町「足田」、八幡町「足洗」などにも注意が必要です。また別の災害地名「アワラ」に関連して下長山町「下アワラ」や小田渚町「荒原（アワラ）」、平井町「安原（アバラ）」といった低地の小字名にも注意が必要で、中根洋治氏によれば平成12年の東海豪雨では名古屋市西区で新川の堤防が決壊しましたが、その地名は「あし原町」であり、対岸の地名は清須市（旧新川町）の「阿原」とされます。また佐奈川右岸の蔵子1丁目交差点付近は大雨の際

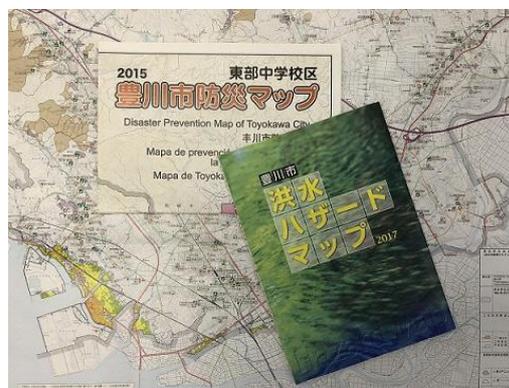


図 25 豊川市防災マップと洪水ハザードマップ

に水はけの悪い場所ですが、区画整理以前の小字名は「前川」であり、他にも内水のはけにくい場所には、小田渚町「下垂」、国府町「流レ」、篠束町「仲堀」、院之子町「下川添」、当古町「下田」、宿町「水入」といったように低地にちなむ小字名が多く見受けられます。

(2) 土砂災害

土砂災害については、愛知県が土砂災害危険箇所情報を県のホームページ「土砂災害マップ」で公表しており、豊川市の防災マップでも、中学校区ごとに土石流危険渓流や急傾斜地崩壊危険箇所、地すべり危険箇所等を掲載しています。豊川市内には北部・西部を中心とした山間部や段丘端の崖面等に土砂災害危険箇所が小字単位で計 234 地区存在しますが（市HPの豊川市内土砂災害危険箇所情報より）、その小字地名に使用される文字から特徴的なものを拾い上げると図 26 のようになります（別町名で同じ小字名あり）。

ア行	●足：足見、●池：大池、池河内、●入：池ノ入、滝ヶ入、山ノ入、滝ノ入、十王ヶ入、竹入、●井：井谷沢、井上、浜井場、井ノ口
カ行	●貝津：酒屋貝津、昇貝津、広貝津、寺貝津、上貝津、●欠：欠下、●川・河：穴河、糠川、下川原、勝川、鳥川原、田川、池河内、●柿：柿木、柿木平、●岸：岸下、●崩：木崩、●窪・久保：水久保、●栗：栗原、●蛇：蛇塚(くちなわづか)
サ行	●沢・峡：東沢、西沢、登り沢、下り沢、検沢、井谷沢、一ノ沢、梨ヶ沢、牛沢、長谷沢、猿沢、西沢、深沢、西峡(ニシザワ) ●坂：親坂、高坂、国坂、●猿：奥猿田、猿沢、●下：諏訪下、下藤井、上ノ山下、欠下、野山下、下川原、権現下、下市、下谷下、下ノ坪、下室、下、●狭：狭石、倉狭間、大狭間、
タ行	●田：早稲田、鶴田、中田、ハリマダ、前田、門田、五反田、一町田、宮田、田川、祓田、木ノ田、三ツ田、佐田地、築田、後田奥、前田口、塩ノ田、神田、地藏田、奥猿田、雨田、後田口、石田、深田、油田、●谷：数谷原、上西ノ谷、長谷山、汲ヶ谷、長谷、井谷沢、向谷、下谷下、東ノ谷、岩ノ谷、長谷沢、●滝：滝ノ入、滝平、滝場、滝ノ入
ナ行	●根：赤根坂、横根、横根山
ヤ行	●山：観音山、長谷山、東山、向山、栗木山、上ノ山下、上ノ山、野山、遠見山、野山下、山ノ神、大宝山、横根山、勝山、山東、山西、山ノ奥、金山、山崎、御城山、寺山、丸山、東山、内山、平山、山陰、会下山、山本、藤ヶ山、上野山、御津山

図 26 豊川市内土砂災害危険箇所の特徴的な小字名

最も多いのは「山」の付く地名で 31 地区、次が「田」の付く地名で 26 地区、そして「沢・峡」の付く地名 14 地区、「下」の付く地名 12 地区、「谷」の付く地名 11 地区、「川(河)」の付く地名 7 地区、「入」の付く地名 6 地区、「貝津」のつく地名 5 地区と続きます。

こうしたことから、山間部で地名に「山」「田」「沢」「下」「谷」の付く場所で人家がある場合には特に注意が必要と言えます。また数は少ないものの、災害地名として次の地名には土砂災害等の注意が必要です。

- 「足」(悪し)のつく足見(金野)、●「欠」(欠けやすい所)のつく欠下(御油)、
- 「岸」(崖地形)のつく岸下(牛久保)、●「崩」(崩れ地)のつく木崩(平尾)、
- 「窪(久保)」(窪地)のつく水久保(千両)、●「蛇」(蛇地名は崩壊地名)のつく蛇塚(くちなわづか：広石)など

ちなみに土砂災害危険箇所でない地域でも、「欠」のつく小字名には欠間(当古)、欠下(六

角)、東欠間・西欠間(御油)、欠下(一宮・橋尾)、欠田(長沢)、欠山・欠田(小坂井)があり、該当地域に崖面等がある場合には注意が必要です。千枚田で有名な新城市四谷地区は鞍掛山の南西斜面にあり、明治37年7月の台風に伴う大雨では家屋10戸と田畑を流出する土砂災害があり11名の犠牲者を出しましたが、鞍掛の「カケ」も災害地名の一つとされています。また市内には、崩壊地名と言われる「窪・久保」には窪美(麻生田)、間窪(六角)、「崩」には崩(市田)、「蛇」には上蛇穴・下蛇穴(千両)もあります。

こうした土砂災害危険箇所や地名に注意が必要な場所にお住いの場合には、事前に防災マップをよく確認の上、大雨警報発令の際は、気象庁や愛知県から情報提供がある土砂災害警戒情報等に留意し、避難準備を心掛けてください。



図 27 新城市の四谷千枚田

(3) 地震・液状化現象

今後30年以内に70～80%の確率で起こるとされる南海トラフ地震については、理論上最大想定モデルでは、震度は下郷地域や沿岸部を中心に震度7、市街地の乗る上郷でも震度6強に見舞われると想定され、市内全域で建物被害は25,000棟、死者数は火災による死者も含め合計1,400人と想定されています。上郷の住宅密集地では家屋の延焼が、また下郷の低地や臨海部の埋め立て地では液状化による建物被害や道路やライフラインの被害も心配されます。また山間部では崖崩れや農業用ため池の決壊の心配もあり、沿岸では堤防が地盤沈下や液状化により崩壊し、津波被害を拡大させる心配もあります。

よって、巨大地震が実際に起きた際には、地震の強い揺れだけでなく、自宅周辺の崖崩れやため池決壊、液状化も考慮した避難を考えておく必要があります。液状化については、防災マップに震度想定とともに液状化危険度マップも併せて掲載してありますので、自宅周辺の震度想定、液状化危険度を一度確認してみてください(図28)。

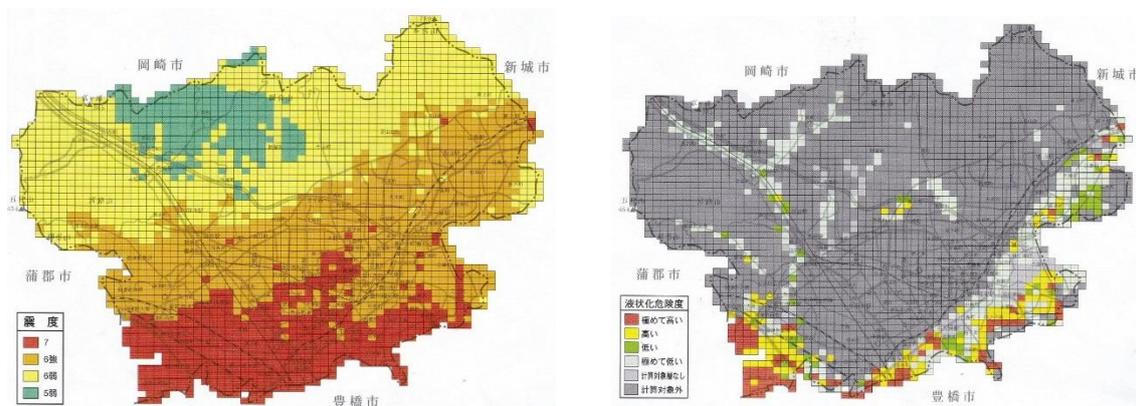


図 28 震度分布図(左)及び液状化危険度マップ(右) ※理論上最大想定モデルによる

地震の揺れや液状化に対し注意が必要な小字名としては、洪水でも指摘した旧河道にあたる「古川」や「カワラ(川原・河原・磧)」の付く地名が挙げられるほか、水田を埋め立てたり過去に沿岸部を開発した「田」や「新田」「浜」の付く地名にも注意が必要です。

ちなみに音羽川の最下流部（御所川）は、かつては安礼ノ崎と呼ばれた砂洲の東側を南流していたものが、江戸時代後期に改修され現在の流路に付け替えられましたが、御津町御馬の小字名には、かつての流路の場所に「梅田」「砂山」「洗出」の名が見られることから、「梅田」は「埋め田」を意味し、軟弱地盤地名と捉えることも可能です（図 29）。

また幕末の安政東海地震の記録では、「御馬村では潰屋（倒壊した家屋）や怪我人が多く、郷蔵も地盤が沈下して皆潰（全壊）した」「御馬村字音羽川通りでも地盤沈下が起こり、海水が流入した」とあり（人びとのくらしと災害）、沿岸部では地震の大きな揺れ、液状化とともに地盤沈下にも注意が必要です。



図 29 御馬村古図（左）、御馬周辺小字図（右）（御津町史より）

（４）高潮・津波

高潮の浸水想定については、愛知県のホームページの「愛知県高潮浸水想定」をご覧ください。室戸台風級の台風による三河湾沿岸部の高潮浸水想定が示され、御津町を中心に高潮被害の大きかった昭和 28 年の 13 号台風や昭和 34 年の伊勢湾台風の実績浸水範囲も併せて確認することができます。（図 30）。

また南海トラフ地震の理論上最大想定モデルでは、御津町沿岸部

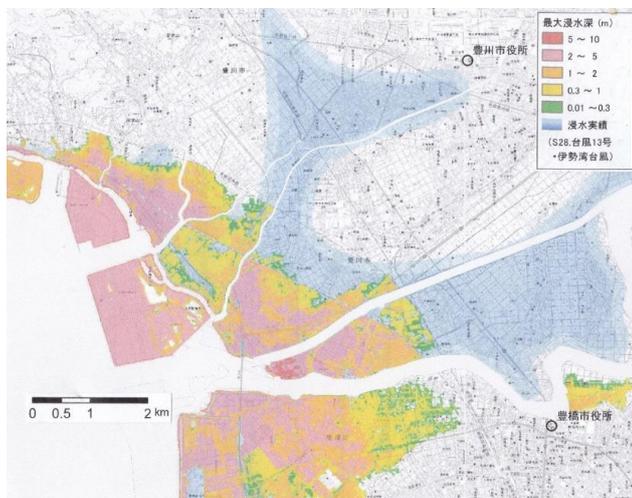


図 30 愛知県高潮浸水想定（愛知県 HP より）

での津波到達時間は最短 77 分、津波高は最大 3.5mと推定されており、安政東海地震の際の記録によれば地震による津波が来襲し、「御馬湊では船積前の廻米 500 俵が激波のために海に引き出された」「津波の波高はこれまでの大潮よりも 3~4 尺（約 90~120 cm）も高く、小坂井の堰（旧東海道沿い）まで繰り返して押し寄せた」とあり（人びとのとくらしと災害）、三河湾内と言えども、市内で過去に実際に津波被害があったことが知られます。

高潮や津波で特に注意したい地名としては「浜」や「塩」の名の付く沿岸部の地名が挙げられ、御津町内には浜田・塩浜（御馬）、下浜道・入浜・揚浜（西方）、浜新田（湊野）、西浜（大草）、前浜（赤根）といった「浜」の付く小字名が確認できるほか、塩入・塩浜（御馬）といった「塩」のつく小字名はかつて製塩を行っていた名残とされます。

こうした沿岸部では、過去に高潮・津波の被害を受けた苦い経験もあることから、鉄筋コンクリート製の沿岸堤防が整備された現在でも災害リスクがゼロとなった訳ではないことを肝に銘じておく必要があります。大型台風襲来の際には高潮注意報や高潮警報に注意を払い安全な場所への早めの避難を心掛けるとともに、巨大地震の際の津波についても、津波注意報や津波警報に注意を払い、自宅周辺の災害リスクを事前に把握しておいて、落ち着いた避難行動をとることが大切です。

皆さんも巻末の小字図で自宅周辺の地名を確認するとともに、地理院地図で自宅周辺の災害リスクをチェックし、災害を我が事として家族皆で防災・減災を心がけてください。

○参考文献・WEB 情報

- 福和伸夫 2010 「地名から地域性に思いを馳せ、土地に適った建物を作る」『Argus-eye』2010 年 10 月号
中根洋治 2012 『愛知の地名－海進・災害地名から金属地名まで』風媒社
谷川健一編 2013 『地名は警告する－日本の災害と地名』 (株)富山房インターナショナル
豊川市桜ヶ丘ミュージアム編 2016 『人びとのとくらしと災害－古文書・古記録にみる豊川災害史－』
松岡敬二編 2016 『古地図で楽しむ三河』風媒社
文化庁編 2017 『日本人は大災害をどう乗り越えたか－遺跡に刻まれた復興の歴史』朝日選書 959
松岡敬二編 2018 『三河国名所図絵 絵解き散歩』風媒社
日本地名研究所監修 2018 『古代－近世「地名」来歴集』(有)アーツアンドクラフツ
近藤恒次補訂編 1980 『新訂三河国宝飯郡誌』国書刊行会
愛知県八名郡 1987 『八名郡誌復刻版』国書刊行会
豊川地域文化広場 1985 第 5 回特別展『豊川の絵図』
安藤勲ほか 2003 「豊川市内の旧町村名の起源考」『豊川史話』第 9 号 豊川市郷土史研究会
豊川市 2003 『新編豊川市史』第 7 巻 資料編 近代
一宮町 1976 『一宮町誌』
音羽町 1975 『音羽町誌』
御津町 1982 『御津町史』資料編 下巻
小坂井町 1976 『小坂井町誌』
平凡社 1981 『日本歴史地名体系』23 愛知県の地名
角川書店 1989 『角川日本地名大辞典』23 愛知県
豊川市ホームページ「豊川市洪水ハザードマップ」「豊川市防災マップ」「豊川市土砂災害危険箇所情報」
愛知県ホームページ「土砂災害マップ」「愛知県高潮浸水想定」
国土地理院ホームページ「防災にも役立つ！地理院地図の使い方」等